

私は大正文学研究の一端として、昨年から「シエルコフ夫人」という人物を調べて来た。「シエルコフ夫人」とは、大正 5、6 年、日本の新聞で報じられた人物である。彼女はアメリカ人で、日本の近代文学の代表作を英訳してアメリカでの出版を企画していた。大正 6 年の一月、来日し、帝国ホテルで多くの作家たちと翻訳について打ち合わせをした。森鷗外をはじめ、多くの作家が彼女との面会について記述しており、新聞や雑誌でも報道記事があった。とりわけ馬場孤蝶と鈴木三重吉は長い文章を書いて、彼女の行動が失礼だと批判した。それだけ、シエルコフ夫人は近代文学において重要な人物であるにもかかわらず、これまで彼女の正体は不明で、生卒年など明らかではなかった。

彼女が語ったこととして、夫は銀行家であること、本人も小説を書いたことは報道されていないが、それ以外のことはまったくわかっていない。その氏名でさえ、本人のサインらしい **Anna Schoellkopf** が『英語青年』という雑誌に掲載されているだけである。

私は厨川白村伝記のなかで、「シエルコフ夫人」のことに触れ、**Anna Schoellkopf** はウィルマの筆名ではないか、という仮説を立てた。ただ、その仮説はやや証拠不十分で、アメリカに渡って実地調査する必要があると思っていた。

ちょうど拙稿の掲載誌が発行されてまもなく、千歳科学技術大学の川辺豊教授から連絡があり、シエルコフ家には **Anna Schoellkopf** という名の女性がいるらしい、との情報提供があった。そこで、短期在外研究の機会を利用して、「シエルコフ夫人」について徹底的に調べようと思った。

ハーバード大学を研究拠点にしたのに二つの理由がある。一つはハーバード大学のワイドナー記念図書館は世界五大図書館の一つで、蔵書量が多く、アメリカ北東部の地方史についても多くの資料が所蔵しているからだ。もう一つの理由はハーバード大学の立地である。事前の調査では、シエルコフ夫人に関する資料はシエルコフ家の故郷バッファローにあることがわかった。また、シエルコフ夫人が結婚するまえに、ニューヨークで女優をしていたことも突き止めた。ボストンはその双方へのアクセスがよく、研究情報も充実していることでハーバード大学を拠点にした。

真っ先に行ったのはバッファローである。シエルコフ家はバッファローでよく知られていた裕福な家族で、バッファロー歴史博物館には、シエルコフ家関係の資料が多く館蔵されているからだ。ハーバード大学のケレン・ソンバー教授と相談したら、自分はバッファローにまだ行ったことはないが、雪が降るのが早いから、なるべく雪のシーズンが到来する前に行ったほうがいいよ、と助言された。さっそく航空券とホテルを予約し、バッファロー行きの準備を始めた。案の定、バッファローから帰ってまもなく、同市は例年にない大雪に見舞われた。きわどいタイミングの、滑り込みセーフであった。

一時間二十分のフライトは快適なものであった。もともと市内観光をするつもりはなかったから、バッファロー歴史博物館とシエルコフ夫人の墓があるデェリヴェール公園の入口にもっとも近いホテルを予約した。地下鉄の駅から徒歩十分以上かかるが、交通の便もさほど悪くない。

バスが到着したら、さっそく乗り込み、ダウンタウンで軽便鉄道に乗り換えた。市内では無料の路面電車だが、Fountain Plaza 駅を過ぎると、地下に入り、有料区間になる。Delavan 駅で降りてみたら、外は横殴りの大雨である。ホテルまで徒歩 15 分かかり、到着したとき、服も靴も水浸しになっている。

チェックインの手続きを済ませてから、さっそくデェリヴェール公園に向かった。入口に立っている係員に墓の場所を聞くと、かなり奥のほうを指さし、

「五時の閉園だから、あと十五分しかない。H 区画に到着するまえにドアがしまっちゃうよ」

初日の予定はこうしてあえなく不発に終わった。

夕食のあと、翌日以降の計画を練り直した。事前調査ではバッファロー歴史博物館は毎週の水曜日だけ夜の八時まで開館しているというから、まず墓を見に行くことにした。

翌朝、デェリヴェール公園に行ってみたら、公園とは名ばかりで、隅から隅まで墓で埋め尽くされている。敷地が思ったよりはるかに広く、歩いても歩いても 23、24、25 の区画のなかをぐるぐるまわるだけで、狐につままれるように、そこから一步も出られない。このままではいつまで経っても埒が明かない。いったんホテルに戻って 30 分ほど休んでから、出直すことにした。

今度はまず墓地事務所を訪ねることにした。だが、事務所は閉まっていて、誰もいない。幸い、巡回の車に乗り込もうとする職員がいたから、彼をつかまえて、シェルコフ夫人の墓の所在地を訪ねた。彼は一枚の地図を手渡してくれ、A 区画にまるをつけてくれた。A 区画だけでも、相当広い。いくら探しても見つからない、もう一度自分のメモを見たら、A 区画ではなく、H 区画だった。

H 区画をぐるっと一周したが、やはり見つからない。ふと見上げると、右手のほうにワシントンの戦没者記念碑のような高い石碑が立っている（写真 1）。まさか家族墓地にはそんな立派な記念碑はないだろうと最初は通り過ぎたが、念のためにもう一度確認した。すると、やはり Schoellkopf 家の墓地だった。石碑のまわりに二代目と三代目の墓碑が囲むように並んでいる。Anna Schoellkopf の墓碑は夫の Walter の隣にあり、1883 年 10 月 21 日～1950 年 9 月 2 日、と書かれている（写真 2）。こうしてひとまずシェルコフ夫人の生卒年がわかった。

初代 Jacob の墓は道路を隔て、F 区画にあった。なぜ、初代だけが違うところにあるだろうと思って、近づいてみたら、鉄の柵に囲まれた墓地が目に入った。墓碑の横に星条旗がただよっており、柵のプレートには、何とアメリカ第 13 代大統領 millard Fillmore の墓と書いてあった（写真 3）。Jacob 夫婦のお墓はそのすぐ隣にあり、しかも、亡くなったのはフィルモア大統領の亡き後であった。このような大それた場所に墓を作れるのだから、地元では相当な有力者であろう。

途中、大雨が降り出し、傘はまったく役に立たない。入口に戻る途中、雨が霰に変わった。くたくたになって、どこかで一休みしようとしたが、腰を掛ける場所もない。何とか公園の

入口にたどりついたときは、もう疲労困憊で気絶する寸前であった。管理事務所の石階段にべたっと座ってしばらく休憩することにした。

30分ほど経ってから、雨も小降りになった。いったんホテルに戻り、しばらくベッドの上に横になった。ところが、歴史博物館のことが気になり、念のために携帯でバファロー歴史博物館のホームページを確認した。すると、Research Libraryは予約が必要だと書いてある。さっそく電話をしたら、図書室は1時から5時までしか開館しないから、今日はもう間に合わない、明日午後1時以降来てください、と言われた。翌日の午後は出発の予定だから、いま行っていいかと聞いたら、4時半までに到着するならいいよと言われた。さっそく服を着て、Uberで車を予約した。5分も経たないうちにUberの車が到着した。4時16分、何とかバファロー歴史博物館にたどり着くことができた。

図書館にはCynthia Van Nessという館員しかいない。電話に出たのも彼女だった。電話で予約した本はすでに用意されており、机の上に並べられている。時間がないから、閲覧しているあいだ、とりあえず一冊を片っ端からコピーしてもらうことにした。ところが、2冊目のコピーを頼むとき、5時に終わるから、今日は間に合わないとCynthiaさんという。そこで、残り分をPDFにしてメールで送ってもらうことにした。所蔵のThe Great Lakesという本は本人がいう小説ではないと思っていたが、読んでみたら、内容は郷土史である。てっきりこの博物館にしかないと思ったら、バファロー公立図書館にも一冊あるとCynthiaさんがいう。結局、Anna Schoellkopfが書いた小説はここで見つからなかった。

帰りに受付の男性に、今日は8時まで開館ですよと確かめたら、展示は5時に終わるよ。ほら、夜にはイベントがあるから、とホールで宴会のセッティングを指さしてくれた。

バファロー歴史博物館の研究図書館にはシェルコフ家族史を紹介するThe Schoellkopfs:1842-1994という本がある(以下、家族史と略称する)。それによると、Jacobの次男LouisがMyra Lee Hortonと結婚し、二人のあいだにWalter Horton, Genevieve, Mary Leeの一男二女が生まれたという。末っ子のMary Leeは一歳未満のときなくなり、Genevieveは1919年、35歳で亡くなった。Walter Hortonは1908年、Anna Mills Johnstonと結婚した。

Anna Mills Johnstonの父親Hilliard Johnstonは弁護士である。彼女はSamford Universityの前身Howard Collegeに入学し、のちにクラスメートのJ. W. Johnsonと結婚した。大学を卒業してからも、医師勉強をしている夫を全力で支えていたが、J. W. Johnsonが医者になってから、二人は離婚した。

ニューヨークに移住した彼女は女優になり、一九〇四年から歌劇やコメディアーなどに出演していた。

この女性には謎めいたところがあり、名字の表示はいくつもあった。Samford大学の資料によると、Howard College時代はAnnie Judgeという氏名であったが、一八九六年、同大学を卒業した後、同窓会名簿にはMrs. J. W. Johnsonという名前になっている。J. W. Johnsonと離縁し、ブロードウェイで女優になってから、Anna Johnstonという名前で活躍

した。

一九〇八年、シェルコフ家の御曹司 Walter Horton Schoellkopf と結婚し、Anna Schoellkopf と名前が変わった。家族史には Anna Mills Johnston が旧姓名とあるが、おそらく本人の証言によるものであろう。なぜ大学時代の苗字が違うのかは謎のままである。奇妙なのは家族史の同じページの右下の四角い枠に彼女の名前は Anna Judge Johnston になっている。それについては何の説明もない。

じつは厨川白村は Anna Schoellkopf の名前に触れたことはない。厨川白村がいう F 夫人が Anna Schoellkopf であるとは、私の推定に過ぎない。この推定を証明するには、ほかの事実の細部とも照合する必要がある。厨川白村の「ナイアガラを見物せざる記」には、ナイアガラでの滞在や F 夫人の別荘について詳しい記述がある。それによると、厨川白村はナイアガラのカナダ側のホテルに滞在していたという。ホテルのポーチからナイアガラ滝が見えるから、いまはなき Clifton Hotel であろう。当時の写真を見ると、厨川白村が言うポーチは外廊下であった。(写真4)

厨川白村はその「山荘」を出て、「ナイアガラ河畔を十哩ばかりドライブした」というから、F 夫人の別荘はナイアガラ川沿いにあるのがわかる。さらに、「古い英吉利風の石造の家」で、「幾萬坪あるか知れない緑樹青草に覆われた小山を庭にして」いるという。また、「ベランダから木の間がれにナイアガラの奔流を見渡し得る位置に建てられている」などと、その立地や周辺のことにも記されている。

そうした情報を総合して、ナイアガラ滝の周辺の地図を眺めると、Niagara River Pkwy と Duffenrin Isle Dr という二本の道路の交わるところに Oak Hall という建物があることに気付く。果たして厨川白村が訪ねた「山荘」なのか、実地調査することにした。

館のまえに来てみたら、その大きさに驚いた。厨川白村が石造りの家と言ったのは確かだ。建物の裏にまわると、20メートル以上のテラスがある。開口部から外の空き地に出られるが、そのさきは雑木林に覆われている。

この建物はシェルコフ夫人の所有なら、彼女が F 夫人であることがほぼ推定できる。そこで、実地調査とともに建物の歴史についても調べた。証拠はすぐいくつも見つけることができた。前述の家族史のなかには Oak Hall の写真が掲載されており、Walter、Anna 夫婦がかつて所有しているという説明がある。

決定的なのは Niagara Falls History Museum が所蔵している A History of Oak Hall という小冊子である。ハーバード大学のワイドナー図書館にも所蔵はないから、博物館に直接交渉し、提供してもらうことができた。

表紙と奥付を含めて、わずか12頁のパンフレットだが、Oak Hall の歴史についての記述はきわめて詳細だ。このパンフレットと大学図書館から借りてきた資料を総合すると、この館は Walter、Anna 夫婦がかつて所有していたことはまちがいない。

在外研究中の実地調査と資料調査を通して、Anna Schoellkopf のみならず、家族のことや翻訳を企画したときの経済的な背景も明らかになった。それだけでなく、Anna

Schoellkopf の孫娘 Anna Lacher さんとも連絡が取れて、彼女が提供した情報から Anna Schoellkopf の伝記的事実を修正することができた。

短期在外研究は時間が限られていたが、ハーバード大学の受入教授、大学の関係部署、バファロー歴史博物館などの機関の協力により、期待以上の研究調査の成果を挙げることが出来た。そうした最新の研究成果を論文にまとめ、雑誌に発表することが決まった。今後、大学院教育のみならず、学部教育にも生かして行きたいと思う。